

農園便り 1月号 (120号) 2023/1

文責 筒口 典康

「あけましておめでとうございます」

ロシアによるウクライナへの侵攻、今後も長く続く状況だ。 そんな中での我が国のロシアからの「北方領土の返還」の動きは、今年も無いであろう。 ともかくにも、ウクライナの人々の窮状を何とかしてあげたい。

大宗教の教団の「長」に、プーチン大統領を説得する力はない。 説得できるのは、中国以外にあるまい。 インドにも期待したい。

私の練馬区の区民農園でのこの1年。 H氏による悪質な嫌がらせ「濃厚除草剤の散布事件」に終始した1年でありました。 区の税の出費もかなりのものであったであります。 都市農業課の皆さんには、大変お世話になりました。 色々と、対処していただきました。

コロナの変異株による8回目の流行も心配されている毎日である。 ワクチン接種、マスク、うがいに手洗い、人との接触を出来る限り避ける……。 これしかありません。 3年前までは、2～3月になると必ず風邪をひいておりましたが、この3年間は全くひかない。 インフルエンザに罹らないのは、コロナ様のおかげでございましょう。 手洗い、うがいが大切です。

宇宙空間には、何とDNA、RNAのアミノ酸、核酸を作る物質が浮遊しているとのこと。 又、地表は、紫外線、放電、放射性物質・・・酸性物質、水、等などに晒されている。 全ての生物が、「億」「千万」年の時間を経過して変異(進化)すると言う。

地上のコロナが変異するのは、当たり前であります。 コロナ・ウイルスは、短期間で変異する。



オカワカメ、作業路の南 11/22



手前 ツルナ 大根 ブロッコリー 11/26

このところの冷え込みで、オカワカメ(雲南百薬草)、ツルナ、サツマイモ、サトイモ・・・の茎葉が溶ける(凍傷)。茹で上がる。冬の寒さで、野菜たちの「糖度」が高まり、美味しくなる。ブロッコリー、カリフラワー、芽キャベツ、キャベツ、白菜、小松菜・・・、みんな甘くなってくる。大根、春菊、水菜も美味しい。野菜たちから味が出る。



プチプチシートを二重に張る 12/13

カリフラワー(ロマネスク) 12/24

イチゴの畝に霜除けのプチプチシートを掛ける。畝の追肥溝を挟んで前側のブロックで、カリフラワー(ロマネスク)を収穫。このロマネスクは、花穂の形に特徴がある。角錐の連続する塊が面白い。とても甘く、美味しい。気に入った。ロマネスクは、スティックブロッコリーと違い花の脇芽が出てこない。地際で茎を切り、追肥溝に茎葉を置く。ロマネスクを片付ける。

「糠」を振る。「菌」(完熟堆肥)を撒く。混ぜてから、「板」を置く。終了。ゴミは全く出ない。

このところの寒さで、耕作区画の道を歩きますと、霜柱が折れて、「ザク」「ザク」。でも、有機物の多いと思われる区画の畑は、霜柱は立っていない。暖かいのである。「土」中の微生物たちの働きで地温が高くなる(発酵熱)。

追肥溝の積み重ねた有機物の上に「板」を置きますとこれにより、水分の蒸発を防ぎます。日光の紫外線を遮断します。「菌」が増殖する。醗酵しまして、地温が高くなるということ。「追肥溝」は、有効である。溝の周りの地温が高くなる。

「軟炭」の砕いたものを撒きます。すると、太陽光を受けて地温が高まる。オザキフラワーで仕入れた「籾殻燻炭」「籾」を撒くこともあります。黒ビニールマルチは、使わない。だいいち、シートを敷くのと片付けが大変ですもの。ビニールゴミは焼却する時に大量のダイオキシシンが発生しますので、私は使いたくない。

乾燥刈草でマルチをします。刈草を地表に置くだけなので、「ラクラク・オクオク」なのであります。雑草の防止もできます。地表に置くだけで、地中に入れません。ともかく「ラクラク・オクオク」なのであります。刈草の接地面では、分解が始まり、少しずつ肥料が供給される。

刈草は、「マメ科」「イネ科」の物を中心に使っています。 作物の残渣、クロタラリア、トウモロコシ、麦、ソルゴーなどの残渣、…。 で、菜園からは、ゴミは出ない。 刈り取って、マルチ材として使います。

刈草は、地中に入れますと、野菜たちの必要な「N」肥の不足がおこります。 栄養失調になります。 地表に置くだけです。 刈草マルチは、「楽楽・置置」、とにかく「ラクラク・オクオク」なのです。



クロタラリアの莢から種子を採る 12/19

抹茶茶碗に2杯も確保 12/19

クロタラリア(えびす草)の莢をバケツに、2杯も収穫しました。 莢から種をほぐしますと(12月19日)、抹茶茶碗に二杯も採れました。 クロタラリアは、「マメ科」植物で、植物全体に養分を多く含んでいるようなので、刈り取って「緑肥」として使っています。 効果靚(てき)面。 ミミズが大喜び。 畑地が粒粒。 ナメクジが退散。 センチュウも居なくなる。 アリも来なくなる。

クロタラリアが20cmぐらいに育ったところで刈り取り、その脇に大根を蒔きました。 12月に入り、収穫していますが、美肌大根。 クロタを潰して臭いがかぐと、如何にも効果のありそうな「悪臭」。 これだなと思いました。 とにかく使っています。

日本の植物ですが「クララ」(マメ科)がありますが、これも同様な効果がありそうです。 山林の裾野にたくさん生えています。「オオルリシジミ」蝶の食草であります。 裾野は、マメ科、富栄養植物のおかげで年々肥えてくる。 もし、クロタラリアの種子のご希望がありましたなら、言ってくださればお分けいたします。 クロタラリアは大層優れた植物である。 大いに利用したい。

また、えびす草(クロタラリア)は、決明子ともいわれて、炒った物を煎じて飲むと、消化器官を始め万病に効くと言う。 種子は、小豆を1/10位にした大きさで、小豆色である。 刈草マルチとして使っている。

今年も、野菜を「有機・無農薬」「不耕起」で頑張ります。 去年頓挫した果菜類。 頑張ります。

籾殻燻炭層を作って「根」の多発生を図る。 で、昨年工夫してみたことを再度試みます。 籾殻層に「根」が追突してそこで、多根になるようなのであります。 枝分かれした「根」からの吸肥根が増大するという話の、追跡です。

大玉トマト、中玉トマト、ミニトマト。今からワクワクしております。水分が大好きな「ナス」でもやってみます。どうなることでしょうか、今からドキドキであります。「一年目から収穫する有機・無農薬栽培」の始まりであります。それぞれの畝に「籾殻燻炭層」を作ります。

乾燥気味の広幅畝、水分多めの畝、中央は作業路を設けます。⇒「農園便り」100号、同、2022年1月号。「やさい畑」(家の光社)2022年4・6・8・12月号、のように作ります。

籾殻層の下は、乾燥カニ殻(芝勝)、醗酵豚糞(グリーンランド株エンザ0279-67-3577群馬県)とマルタ玉肥(生活クラブ生協・長浜商店0280-56-1100栃木県)、ダルマ堆肥(タキイ種苗)、自作のぼかし肥料等の有機肥料を使います。「糠」を混ぜます。また、それぞれの広幅畝に追肥溝を作る。あとは、水管理です。

悪い癖で、種を買いこんであるのに適期を逃す。「適期・適作」が基本ですのにずれてしまう。前作の収穫を続けているうちにエラー。困ったもんだ。注意しよう。種子も高くなりましたから無駄にはできない。最後は混作昆播と言うことになる。種子で自家採取できるものは、やってみたい。

上石神井南農園の廃園で、関町南3丁目農園に変わりました。バス停で、三つも離れていまして、遠くなりました。青梅街道の南、千川上水に挟まれた地域にあります。資材を運び込むことも少なくなり、それはそれで工夫はしておりますが、体への負担が多くなりました。

一年中採取できる野菜としまして、オカワカメ(雲南百薬草)、ツルムラサキ、ツルナをお薦めします。年中収穫できる野菜についても栽培計画の中に取り込んでいきたいものです。収穫の長いものの活用です。アシタバも収穫期が長いので使いたい。

オカワカメは、ベトナム、メコン川上流、中国南部(雲南)のミャオ族の人達の常備野菜のようでして、霜が降りるまで収穫できる野菜である。ツルムラサキよりもアクが弱いようで食べやすい。葉がハート型をしていて、サラダにして良い。お母さんが、マヨネーズで「おたんじょうおめでとう」等と書き込めば、お子さんも喜ぶことでしょうか…。子らが、野菜好きになるかもしれません。

松田さんの奥様に、「バジル(ハーブ)のようにペーストに作ったら良いと思いませんか」とか。「瓶詰にして、商品化できないかな～」と伝えましたが、まだ、作られてはいない。バジル、オカワカメ、ツルムラサキは、グリーンペーストに使える。緑色のジャムなんて素敵ではないですか。

ミャオ族の生活ぶりをテレビで見るようにしているのですが、その様な放映はない。現地に行ってみないと分かりませんね…。

ツルナ ホウレンソウの仲間のように「ヒユ科」なのでありましょう。

種子の形は、角が出ていて、ホウレンソウにそっくりだ。フダンソウにも似ている。「葉山」や「逗子」の浜に行きますと、岩陰や砂地に生えている。

「エグ味」が強いので、茹でた後に水で晒していただく。サカタ種苗で野菜として売られている種子からつくりましたら、ほとんどエグ味がありませんでした。品種改良されたものと思います。

ツルナは、霜が降るまで一年中繁殖するのであります。寒さに当たると、とても美味しいのであります。霜に当たると溶けてしまう。初体験でありました。美味しい野菜なので、気に入った。繁殖力がすごい。

茹で菜、汁物の具にお薦め。多めに茹でておいて、必要に応じて、炒め物鍋物の具に使うと良い。5株ほど植えました。1株は、種をつけようと、放任しました。種子は低温に強い。春になれば、こぼれた種子から沢山の芽が出てくることでしょう。とにかく放任栽培ができて、旨い野菜です。



ツルナ 寒くなりまして美味しさが増す 11/26

キャベツ も元気 11/26

家の光社「やさい畑」4・6・8・12月号に「小菜園徹底使いまわし術」を連載していただきました。畑の基本的な構造、土作り。「元気野菜」を育てて、無農薬・無化成肥料で、有機肥料だけを使って、美味しく、栄養豊富な野菜を作ることができることを提案することができました。

有機栽培は収穫を上げるのがなかなか難しいと言われております。区民農園のような短期間(二年)で何とかしようと、色々工夫しております。ぼかし肥料の作り方、使い方。手に入る有機物、市販されている有機肥料、無料の材料を探す。「オクオク・ラクラク」の提案でもありました。「やさい畑」4月号の「畑の構造」は、大面積でも使える考え方であると思います。

千葉県佐倉市の林重孝氏の林農園、竹内孝功市の「自然菜園」、木嶋利男・西村和雄先生。「元気野菜作り」の吉田俊道先生、実践家の薄上秀男氏等から多くを学んだものであります。循環する私の菜園は諸先輩から学び、お世話になりました。ありがとうございました。この様な1年でありました。

6ページに「やさい畑」の4月号の88・89頁をのせました。参考にして戴ければ幸いです。「やさい畑」さんで編集されて、たいへん解り易くなっているの、少しずつ載せてまいります。 T、

最小・最短で
有機・無農薬栽培を実現する

小菜園 徹底 使いまわし 術

筒口典康さん(83)は、東京都の15㎡の小さな区画農園で、有機・無農薬の野菜づくりをおこなっています。小さなスペースをいかに有効に利用するか、苦心・工夫の日々をつづった個人誌「農園便り」は通算100号を超えました。試行錯誤を重ねる中で培われたテクニックの数々を公開します。

栽培／筒口典康 まとめ／編集部 撮影／若林勇人 イラスト／入倉瞳





写真奥側が筒口さんの利用区画。手前は別の利用者が化学肥料を使用して育てているハクサイ。20cm程度しか離れていないのに、食害の程度がまったく違う



土づくりには、堆肥と有機肥料、それに畑から出た作物残渣のみを使用する

西南から見た筒口さんの利用区画全景。狭さをカバーするため、空間を立体的に使っている



“無農薬なのに虫食い知らず” は、小菜園でも可能です

自治体が運営する市民農園や、農家が運営する貸し農園などの割り当てられた区画内で野菜づくりを楽しんでいる方も多いでしょう。スペースと利用期間に制限がある区画農園では、有化学肥料にも農業にも頼らずに栽培を行うのは、なかなか難しいことです。以前の利用者がどのような栽培を行っていたかはまちまちですし、せっかく手をかけて土づくりをしても、およそ2〜3年間の利用期間が過ぎれば、明け渡すか、別の区画に移動せざるをえません。

最短で理想の土づくり

そんな条件下でも、知恵と工夫で「有機・無農薬」を実現している人がいます。東京都の筒口典康さんが利用しているのは自治体が運営する市民農園で、区画面積は15㎡、利用期間は2月からの1年11か月間です。化学肥料を使用していない筒口さんの畑でできた野菜には、不思議なことにほとんど虫がつきません。「比べて申し訳ないけれど……」と、隣の区画を覗いてみれば、違いは一目瞭然です。筒口さんは、この理由を「野

菜がぜいたく吸収をしないから」と説明します。堆肥と有機肥料を中心とした土づくりによって、ほんとうに必要なぶんだけの栄養を吸収しながら、ゆっくりと生長するため、害虫が食べにくい強い野菜になるのです。通常、畑がこの境地に至るには長い時間がかかりますが、筒口さんは「初年度からの収穫」をめざして最短でたどりつきます。小さな栽培スペースの潜在能力を底まで引き出す「徹底使いまわし術」。まず初回は、基本の4つの術で、畑の基礎を築きましょう。

筒口さんが毎月1回発行する手作りの「農園便り」。東京の農業書センターなどで配布して、同好の士らと菜園情報を共有している

